

## 人材育成事業－先輩経営者との意見交換会が開催

－(株)ヒキフネ（東京都葛飾区）の石川相談役の講演会に全国から若手経営者 24 名が集まる

全鍍連経営委員会は、平成 18 年度まで「若手経営者座談会」を行い、全国の青年部・若手経営者との交流事業を行ってまいりました。その後、一定の成果が得られたことから、当委員会では平成 19 年度から検討を行い、その後継事業として、平成 21 年度にはじめて、先輩経営者と次の世代を担う後継者との“はしわたし”を行い、清川メッキ工業(株)会長の清川忠氏を交えて、「絆－先輩経営者と直にふれあい」、「挑戦－その経営理念等を自社にも活かそう」を目的に研修会を開催しました。

今年度の研修会は株式会社ヒキフネ（東京都葛飾区）で実施、第 1 部は、同社元社長で現取締役相談役の石川進造氏（全鍍連元近代化推進委員／現東京都鍍金工業組合監事）による講演会を行い、その経営哲学を直にお聞きすることができました。第 2 部は、石川氏とヒキフネスタッフとを交え、経営理念なども含めて直に質問できる場を設け、様々な意見や活発な情報交換が行われました。

### はじめに

当委員会による「先輩経営者との意見交換会」は平成 23 年 2 月 18 日（金）13:30 より、株式会社ヒキフネ（東京都葛飾区）の協力により、同社会議室にて開催された。

研修会のプログラムは 2 部構成で、第 1 部はヒキフネが現在まで歩んできた経営プロセスと経営計画、次にこうしたプロセスを経て、石川進造氏による講演会、第 2 部は講師を交えて意見交換会を行った。

今回の事業開催にあたり、当委員会は東京都鍍金工業組合の姫野理事長より、株式会社ヒキフネの石川進造氏に講師をお願いして実現したものの。

### 参加者（敬称略）

全鍍連役員からは東京組合理事長で姫野会長、当委員会からは土井委員長、吉田副委員長、藤井副委員長、志田副委員長が参加した。

ヒキフネ様からは下記 8 名が参加された。

取締役相談役	石川 進造
代表取締役会長	石川 輝夫
代表取締役社長	石川 英孝
取締役技術部長	小林 道雄
取締役工場長	笠井 正夫
取締役品質保証部長	津久井 豊
取締役副工場長	芦辺 義明
取締役総務部長	鈴木 昌史



開会の辞を述べる土井委員長

若手経営者側からは、総勢 24 名が参加した。

(以下北から組合順に掲載)

池田 延寿 [東北・北海道]

(太平化成工業株式会社 代表取締役)

加賀谷孝義 [東北・北海道]

(太平化成工業株式会社 取締役本部長)

丹野 恭行 [東北・北海道]

(秋田化学工業株式会社 専務取締役)

三浦 直暁 [東北・北海道]

(株式会社ケディカ北上工場 副工場長)

元井 広樹 [東北・北海道]

(株式会社エム・ティ・アイ 取締役)

福井 通人 [千葉]

(福井電化工業株式会社 社長室長)

真木 洋平 [神奈川]

(株式会社さくら鍍金 代表取締役)

板倉 宏和 [神奈川]

(有限会社千歳鍍金工場)

内山 泉 [東京]

(有限会社内山鍍金工業所)

鈴木 信夫 [東京]

(千代田第一工業株式会社代表取締役社長)

茅野 一憲 [東京]

(有限会社双和鍍金)

内藤 喜達 [東京]

(平和工業株式会社 常務取締役)

八幡 義一 [東京]

(八幡鍍金工業株式会社)

伊藤 卓 [愛知]

(太陽電化工業株式会社 常務取締役)

竹内 弘一 [愛知]

(株式会社サーテックカリヤ取締役営業部長)

山内 一生 [愛知]

(丸昭産業株式会社 常務取締役)

中山 敏 [三重]

(旭鍍金株式会社 専務取締役)

梅田雄一郎 [富山]

(株式会社ユニゾーン 代表取締役専務)

黒田 優 [福井]

(アイテック株式会社 専務取締役)

山本 剛史 [京都]

(清水長金属工業株式会社 製造部製造管理課長)

池田 裕樹 [大阪]

(三和鍍金工業株式会社 技術グループリーダー)

寺内 宏志 [大阪]

(国光鍍金工業株式会社 専務取締役)

土井 康巨 [大阪]

(株式会社土井鍍金 代表取締役社長)

山田 亮 [九州]

(株式会社九州電化 製造部次長補佐)



石川会長による会社説明



石川社長による会社説明

## 講演会の模様

○私は下町の墨田生まれで、父（石川義信氏）が「ヒキフネめっき工場」を設立した。当時輸出用のアンチモニー製品のめっきを中心に手掛けていた。両親2人とも働いていたが、当時の労働環境は肉体労働でもあり、2人を手助けしたいという親孝行の思いから、職場に入った。墨田区は、装飾めっき発祥の地であり、当社は今でも装飾めっきを基礎として操業を行っている。私が子供のころ、城南地区（品川区・大田区など）では、工業用めっきが盛んであった。子供ながらに今後は装飾めっきだけでは通用しないという意識が生まれたのを覚えている。

○高度経済成長期に突入。大阪万博が開催された時、記念品用の金杯の受注が大量に入ってきた。当時、金杯のめっき加工ができる所が少なく、これをチャンスととらえ、一気に生産を加速させた。これが成功を収め、いつしかライバル企業を追い抜き、かつて主力としていたアンチモニーのめっきから、徐々に脱却していった。その頃から、「仕事はまず手をつけることが大事（拙速主義）」であり、結果はともかく、まずは行動を優先させるという考えに至るようになった。

○その後会社は徐々に軌道に乗り始めた。工場の移転を行い、従業員も80名程度までになった。一方でライバル企業の事業失敗も目にしてきた。傘の骨のめっきを行っているところでは、特殊な自動機を導入していたが、高額な投資に対し十分な利益が得られず、有名企業が脱落していった。その頃から、弟（石川輝夫現会長）と協力しながら会社の体質を抜本的に見直すようになった。親友の助言などを参考にし、自社研究開発に向けG P 3計

画を実施した。G P 3とはGolden、Pioneer、Powerful、Passionの頭文字をとったものである。まず、新卒を9人採用することを決定した。当時の会社の規模で、経験値ゼロの新卒を採用することは1つの賭けでもあった。また企画室を新たに設置し、研究開発に注ぎ込める環境を整備した。やがて技術系新卒者は試行錯誤の中で、電鍍金型などの開発分野において、次々と成果を上げていった。私は社全体のエネルギーを10とすると研究開発に割くエネルギーは1程度でいいと考える。残り9のエネルギーは製品を市場に売り込むために傾注すべきである。私は残りの9のエネルギーを、過去十分に生かすことが出来なかったことを悔いている。



「仕事はまず手をつけてみるのが大事（拙速主義）」であると語る石川進造相談役

○また当社が失敗した点は、中国への進出である。商社を通じて中国へ進出した際、ある装置をめぐり、現地中国人スタッフとの翻訳がかみ合わず、トラブルが生じたことがあった。コミュニケーションや文化理解など、海外進出への下準備が足らなかったのかもしれない。

○仕事とは、幸運な偶然と不幸な偶然が重なり合う中で、進行していくものである。従って成功や失敗も言わばひとつの歴史の流れの中で生まれているものであり、私たちはその場その場でベストを尽くすことが重要であると考えている。最近当社はロゴを変え、新たに心機一転を図った。日本の和の部分とヒキフネのブランド力を融合させ、今後また新たな可能性を模索していきたい。

講演会の中で石川相談役がご推薦された書籍を以下にご紹介いたします。

1. 日本辺境論

(著者：内田樹、出版社：新潮新書)

2. 経済成長なき社会発展は可能か

(著者：セルジュ・ラトゥーシュ、出版社：作品社)

3. フォールト・ラインズ「大断層」が金融危機を再び招く

(著者：ラグラム・ラジャン 出版社：新潮社)

## 意見交換会

Q 1：GP3 計画実施の時、いかにして人材を育てていったのでしょうか。

A 1：自社で様々な勉強会を重ねるなどの努力は行いました。ISO については、現場と密着して対応するように心がけました。コンサルタントなどを採用したこともありましたが、やはりめっき業を理解されていない部分が多いので、その部分を補うのに時間を割いてしまいました。

Q 2：日時決算などの情報公開に対して、従業員からの反応どうだったのでしょうか

A 2：経常利益等すべて情報をフルオープンにするように心がけています。これは「利益」という考え方を社員全体が共有することを目的としています。また当社では各社員に対して等級を与え評価しているが、基本的に等級にかかる給与等も含め全て隠していません。今のところ、社員は皆趣旨を理解してくれて、特に不満の声は上がってきていないみたいです。もしかしたら私の見えないところでは色々言っているかもしれませんが(笑)

Q 3：事業継承を行う中で、どういったところに気を使ったか。

A 3：事業継承にあたり、当社では特に計画は立てていませんでした。心がけたのは、なるべく迅速に継承しようとしたところですね。結果的にうまくいったというところです



若手経営者の質問に答える石川相談役

おわりに

多数の参加者が訪問したにもかかわらず、社員一人一人の対応が非常に丁寧であり、大変アットホームな印象をもつ会社である。ヒキフネブランドの原点はやはり「ヒト」にあるということを改めて痛感した。

講師を引き受けて頂いた石川相談役をはじめ、場所と工場見学のご承引と当日、講演会から懇親会までお付き合い頂きました石川会長、石川社長様並びにヒキフネの皆様方、また、参加募集にご協力頂いた会員組合と執行部の方々には本誌をお借りしてお礼を申し上げます。(了)